



清水 博

SHIMIZU Hiroshi

日本政策投資銀行
常務執行役員関西支店長

関西の魅力を成長の力に ～若い世代が集う 地域をめざして～



私は大阪出身で、大学を卒業するまで関西に住んでいました。社会人になり2年ほど大阪で勤務しましたが、それ以降東京勤務が長くなり、一昨年の関西支店長着任により約30年ぶりの関西生活を満喫しています。

久々に関西に住んで実感するのは、生まれ育った場所であるが故に気づかなかったその「独自の魅力」と「住み良さ」です。多彩な文化、歴史、自然などを肌で感じられるとともに、今後についても、2025年の大阪・関西万博を含めその前後に計画されているさまざまなプロジェクトが実現すれば、関西都市圏のさらなる発展が見えてきます。大都市機能を備えつつ、これだけ多様な魅力が凝縮された地域は他に類例がなく、世界を見渡しても唯一無二のものではないでしょうか。

関西2府4県の生産年齢人口は2015年から2045年の30年間で約3割減となることが見込まれています。労働力不足を補うという観点では、知恵・経験のあるシニア世代や女性のさらなる活躍・社会参画、AIなどのデジタルトランスフォーメーションによる生産性向上などが考えられますが、地域の活力という点では人の集積、特に将来を担う若い世代が住みたくなり、かつ子育てをしたくなるような環境をいかに創出するかが極めて大切だと思います。住み良さという点では、例えば家計の中で最も大きなウエイトを占める住宅コストで大阪は東京の約6割程度ともいわれています。若い世代にあまり意識されていない、こうした生活コスト差を生涯換算するとどれほどになるのか、もっと見える化することが必要かもしれません。そして何よりも、関西がめざすべき方向は、東京に次ぐ都市圏ということではなく、東京にはない独自の魅力に溢れる都市・地域であることでしょうし、それら独自の魅力を効果的に創出し、発信し続けることが大切ではないでしょうか。

当然、働く場を提供する関西の企業の役割も非常に重要

になってくると思います。先日開催された関西財界セミナーにおける前野隆司 慶應義塾大学教授の基調講演「幸せな職場の経営学」は大変印象的でした。ひと言でいうと従業員の幸福感と創造性・生産性の向上には高い相関関係があるというお話ですが、AIなどによる自動化が進展すればするほど、人に求められるのは人ならではの価値の創出ということだと思われます。企業経営者にとって、何十年後かに経営のバトンを渡すことになる若い世代が、本人の努力を前提としつつも緊張感とワクワク感を感じられる職場環境をいかに形成するかが今後の大きな課題になるでしょう。

優秀な学生や若手がスタートアップに挑戦しているという話も最近よく耳にします。非常に頼もしいと感じる一方で、スタートアップにとっては既存企業との協業が効果的なケースが多く、その点では既存企業内の若い世代のイノベーティブなマインド醸成がワンセットで必要ではないかと感じるところです。関西地域で若い世代のこうしたイノベーティブな運動のサイクルがより大きく回り始め、働く場、交流する場としての関西の魅力がよりいっそう高まることが何より求められていると思います。

その他、地域の魅力を顕在化する取り組みとしては、来年のワールドマスターズゲームズ2021関西を契機とする関西におけるさらなるスポーツの振興、既存の枠組みにとらわれない新しい産学連携の追求、インバウンドを契機とする海外に対するオープンマインドの醸成、アジアを軸とする世界とのビジネス交流の拡大などがあり、さまざまなチャンスと可能性が関西には広がっていると思います。「三方よし」の精神が根づいている関西の企業が、昨今注目されつつある世界のマルチ・ステークホルダー資本主義の先頭に立って、関西を若い世代にとってさらに魅力ある地域に導くことを強く期待したいと思います。

(談)